

[009] 九州大学附属図書館研究開発室年報 :  
2004/2005(9)

<https://doi.org/10.15017/2833>

---

出版情報 : 九州大学附属図書館研究開発室年報. 2004/2005 (9), pp. 1-63, 2005-06-01. 九州大学附属図書館研究開発室

バージョン :

権利関係 :



## 第7回アジア電子図書館国際会議と上海の大学図書館視察

片岡 真\*

〈抄 録〉

2004年12月に上海において開催された第7回アジア電子図書館国際会議 [7<sup>th</sup> International Conference on Asian Digital Libraries (ICADL 2004)] の概要について報告する。あわせて視察する機会を得た復旦大学及び上海交通大学の図書館の状況について報告する。

7<sup>th</sup> International Conference on Asian Digital Libraries (ICADL 2004) and academic libraries in Shanghai

KATAOKA Shin\*

### 1 はじめに

このたび附属図書館研究開発室の池田大輔先生が研究代表者となっている「九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト (P&P)」 D タイプ「ユビキタス社会における電子図書館のソフト面高度化に関する研究 (H16～H17)」の研究活動の一環として、2004年12月13日～17日の日程で上海を訪問することができた。目的はこの期間開催された第7回アジア電子図書館国際会議 [7<sup>th</sup> International Conference of Asian Digital Libraries, ICADL 2004] へ参加するため、メンバーは池田先生、情報基盤センターの伊東栄典先生、情報基盤センター大学院生の竇鈺峰 (トウ・ギョクホウ) さんで、附属図書館事務部から星子奈美さん (当時六本松分館受入掛) と私 (当時情報管理課雑誌情報掛) が加わった。このような会議に事務職員が同行することはこれまであまり例がなかったが、研究開発室が行う電子図書館の研究には現場に携わる図書館職員の協力が不可欠であり、図書館職員も関連する研究会や国際会議に出席する必要があるという、池田先生や事務上層部の強い思いがあり実現した。

### 2 上海へ行くまで

国際会議への参加は初めてのため何から始めてよいか戸惑ったが、幸い参加申込や宿泊の手

配はインターネット上で行えるようになっていた。しかしネット上での登録とはいっても意外に手強く、主催者側とE-Mailのやり取りを繰り返した後ようやくIDナンバーを受け取ることができた。中国へのドル建て銀行振替も私には骨の折れる作業であった。

また、今回事務部からのもう一人の同行者である星子さんとともに、会議の途中時間を見つけて他の場所を訪問することを認めていただいたため、上海で九州大学と大学間交流のある復旦大学、上海交通大学の図書館を視察することを思いついた。とはいえ、私は中国の図書館事情を全く知らず、中国語も話せないため、国際交流推進室の西原さんに頼んで、各大学の国際交流担当部署へ連絡してもらい、図書館への視察を申し込んだ。とここまでは威勢がいいのだが、日本語と片言の英語だけで本当に中国の図書館で堂々と立ち振る舞えるのか、ほんとうに無事視察ができるのか、とても不安になった。

### 3 アジア電子図書館国際会議について

アジア電子図書館国際会議 [International Conference of Asian Digital Libraries, ICADL] は、1998年より毎年1回アジアの各都市で開催されている国際会議で、電子図書館に関する幅広い領域の研究や実践成果を発表する会議である。第7回となった2004年は「電子図書館：

\*かたおか しん 九州大学附属図書館利用支援課調査サービス係 (〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1) E-mail: shkata@lib.kyushu-u.ac.jp

国際的な協調と融合」というテーマを掲げて上海で開催され、上海交通大学と上海図書館がホストを務めた。



写真1 会議室での一風景

会議はRoom A、B、CまたはConference Hallで同時進行し、2日目から最終日までの4日間で約80の発表、各スポンサーの戦略紹介があり、全て英語で行われた[1, 2, 3]。私は知識情報システム、メタデータを利用した電子図書館、文脈拡張型の電子図書館サービスといったチュートリアルに参加した。内容は画面に表示される資料を追いかけることでようやく半分程度理解する程度だったが、日頃一般に普及した技術に使用者としてしか接していない私にとって、研究者による技術的なアイデアが図書館のサービスにどのような形で実用化され得るのか、イメージするのが少々困難であった。対照的にHewlett-Packard社によるD-Spaceの説明、Thomson Scientific社の現在と今後の展望、Endeavor Information System社の図書館システム戦略といったベンダーによるプレゼンテーションは興味深く聞くことができた。特に新鮮だったのはEndeavor Information System社の図書館システム戦略で、電子リソースに焦点を当てた統合モジュールと図書館業務システムモジュールについて紹介があった。

- 1) 統合モジュール： 図書館が管理する全てのリソース（所蔵データ、電子ジャーナル、抄録・索引データベース、博士論文、AV資料、電子地図など）のリンク、統合検索、eラーニング、電子リソースマネジメント環境を提供する。
- 2) 図書館業務システムモジュール： ユー

ザ・インターフェース、アクセス管理、個人化、蔵書管理を提供する。

このように明確なビジョンを持って電子リソースの管理・提供に取り組む姿勢は、さすがに市場の発達した北米の企業である。そしてここで得られた知識は、早速ベンダーホスティングの電子ジャーナル集（Serials Solutions社のE-Journal A.M.S）とリンクリゾルバ（Serials Solutions社のArticle Linker）導入に活かされた。

ところで、昼間の会議での熱気をそのままに、夜はレセプションやエンターテイメントが用意されていた。特に4日目は上海交通大学が誇る交響楽団による演奏会が開かれ、プロ並みの演奏力を披露してくれたのが印象的であった。その他、主催者が会議期間中様々なオプションツアーを用意しており、周荘の風情ある水郷古鎮を半日で回るコースにたいへん心惹かれたが、観光で来ているのではないと自分に言い聞かせ思いとどまった。

#### 4 復旦大学を訪ねて

復旦大学は1905年創立の総合大学で、学生数は36,000人以上。中国を代表する大学の一つである。図書館は400万冊以上の蔵書を持ち、メインキャンパスに文系図書館と理系図書館、医学キャンパスに医学図書館があり、今回はメインキャンパスを訪ねた。

目指すキャンパスは上海中心部からやや北に位置し、電車の駅から一本道をしばらく歩くと辿り着けそうだったが、これは間違いだった。上海では道路、高層ビルなどの建設ラッシュで街全体がコンクリートの粉塵で覆われた印象があったが、ここはまさに幹線道路の建設中。すれ違う人の多くはマスクをしており、心地よい散歩とはほど遠かった（写真2）。

復旦大学へ到着すると、大学の国際交流担当である洛[Luo]さんが迎えてくれ、午後いっぱいかけて各図書館を案内してくれた。洛さんは日本に滞在経験があり、普通に日本語で会話することができたので、洛さんの通訳で細かいことも色々聞くことができた。

見学してわかったことを挙げると、次のような具合である。



写真2 復旦大学への道



写真3 理系図書館の前で

- a) 図書館資料は図書・雑誌、国内・外国といったカテゴリごと、または学生、大学院生、教員といった利用者別の閲覧室へ収められており、各部屋に司書が配置されている。
- b) 閲覧室への飲み物持込は禁止だが、各閲覧室外に各自の飲料置き場が設けられている(写真5)。
- c) 1949年以前の雑誌や香港、台湾の雑誌は特別閲覧室に所蔵しており、利用を教員と文系大学院生だけに制限している。
- d) 貴重資料にも専門の職員がおり、その管理だけでなく研究も行っている。
- e) 図書館の蔵書は全て遡及入力が終わっている。
- f) CALIS [China Academic Library & Information System] を利用して目録作成、ILL、電子リソース購入を行っている [4, 5]。
- g) 図書館システムはDynix社のHORIZONを利用している。
- h) 電子ジャーナルリスト管理は専任職員が行っており、利用可能タイトル、収録範囲な

どをメンテナンスしている。

- i) 中国では電子図書が発達しており、各種電子図書システムが利用できる。

図書館見学後は、洛さんの上司も加わって、大学の国際交流会館で上海蟹を始めとする中華料理と上海老酒でもてなしていただいた。



写真4 文系図書館雑誌閲覧室の風景



写真5 閲覧室外の飲料置き場

## 5 上海交通大学の包兆龙図書館

上海交通大学は1896年創立の南洋大学を前身とする理工系に伝統ある大学で、学生23,000人が在籍している。3キャンパスそれぞれに図書館があり、蔵書数は230万冊を誇る。私たちはメイン図書館である包兆龙図書館 [Pao Sui-loong library] を訪問した。図書館に着くと、ICADL受付での段取りどおり情報科学技術研究所の夏 [Xia] さんが出迎えてくれた。夏さんはデータベースを管理する仕事をされていたので、電子リソースについていろいろ質問させていただいたが、快く答えてくださった。

- a) 40種のデータベースを契約しており、データベース毎に担当する職員がメンテナン

スを行っている。

- b) 年間資料費1,200万元のうちデータベースの資料費が600万元、うち3分の2を外国データベースに費やしている。
- c) 電子ジャーナルは、オンライン上の契約だけでなく、できる限りCD-ROM媒体でも保存している。
- d) 中国の学術図書館コンソーシアムCALISの南東地域センターが置かれ、上海交通大学がこの地区で中心的な役割を果たしている。
- e) Dynix社の図書館システムHORIZONを利用して資料を管理している（上海地区の大学図書館でコンソーシアム契約しているものと思われる）。
- f) オンライン（チャット）・レファレンスを行っており、回答を行う端末に職員が常駐しているが、そのために忙しくなっている。  
そのほか電子リソース以外のことについても次のことを教えてもらった。
- g) 職員200名程度で運営しているが、その他に20名のアルバイト職員（学生、再雇用）を雇い、書架整理などを担当している。
- h) 閲覧室への荷物持ち込みはできないためロッカーを設置しているが、鍵は利用者が各自持参する（学内売店で鍵を売っていた）（写真7）。
- i) 館内に上海図書館（公共）の分室を設置しており、上海図書館から図書の取り寄せができる（写真8）。



写真6 外国図書閲覧室の入口



写真7 自分の鍵を使って利用するロッカー



写真8 上海図書館の分室



写真9 包兆龙图书馆の前で（左から夏さん、片岡、星子）

## 6 おわりに

上海は初めての訪問だったが、まず文化の違いにショックを受けた。今回は少し郊外に宿をとることになったが、そこでは横断歩道を歩行者特権とばかりぼんやり歩いていると、たちまち猛スピードの車にはねられそうになり、歩道ではクラクションを鳴らし続けながらバイクがひっきりなしに走り抜けてゆく。そして人気の少ない路地で日本語を話していると、すぐに後

ろをつけられる。満員の地下鉄でも、降りる人を待って電車に乗り込む人はいない。ここは強い者だけが生き残る社会なのだ。

また物価についても、5元ほどあればスペシャルな天津煎餅と豆乳でおなかをいっぱいにすることができる一方で、南京路のハーゲンダッツでコーヒー一杯が50元といった具合に、複数の物価が共存していた。

大学図書館は、両大学とも一見古いスタンスを残した伝統的な図書館といった印象を受けたが、よく覗いてみると、両大学とも遡及入力を完了させ、CALISによる電子リソースのコンソーシアム契約やバーチャルレファレンスシステムの構築、地域コンソーシアムによる北米図書館システムの導入といった戦略的な取り組みがあった。

中国国内での激しい競争に勝ち残った今のエリートたちが、10年後にどんな社会を作っているのだろうか。それを想い、私自身今の職場でできることをもう一度見直してみようと心に誓った。



写真10 天津煎餅を買い求める星子さん



写真11 431Km/hを計測したリニアモーターカー  
(上海郊外と空港を結ぶ)

## 参考文献

- [1] Chen, Z. ; Chen, H. Digital Libraries: International Collaboration and Cross-Fertilization. 7<sup>th</sup> International Conference on Asian Digital Libraries (ICADL 2004). Springer, 2004, 690p. (Lecture notes in computer science, 3334)
- [2] 7<sup>th</sup> International Conference on Asian Digital Libraries (ICADL 2004). Tutorials. Digital Libraries: International Collaboration and Cross-Fertilization. Shanghai, China, 2004
- [3] Chen, Su-Shing. Report on the 7<sup>th</sup> International Conference on Asian Digital Libraries (ICADL 2004). D-Lib Magazine. 11(1), 2005, p. 13-17. (Online), available from <http://www.dlib.org/dlib/january05/chen/01chen.html>, (accessed 2005-07-28)
- [4] 呑海沙織。中国における学術図書館コンソーシアム。情報の科学と技術。52(3), 2002, p. 272-277. (ISSN 0913-3801)
- [5] Yao, XiaoXia ; Chen, Ling. アジア諸国における情報サービスの利用 第3回：中国CALISの概要。澤田裕子訳。情報管理, 47(8), 2004, p. 528-534. (ISSN 0021-7298)